【論文】

東亜同文書院生が見た日中戦争初期の仏領インドシナ

北海道大学大学院経済学研究院 地域経済経営ネットワーク研究センター・研究員 **湯山 英子**

はじめに

東亜同文書院生の『東亜同文書院大旅行誌』（以下、『大旅行誌』）については、多くの研究蓄積があるものの、主な訪問地である中国大陸に限定する傾向が強く、東南アジア地域への訪問については、あまり取り上げられることはなかった。しかし、近年、東南アジア地域にも焦点があてられるようになり、加納寛によって時代別変遷、訪問地域別の特徴が明らかにされた[1]。近代の東南アジアと日本との関係を解明する上で、貴重な研究と言える。

かつて筆者は、仏領インドシナの日本人と東亜同文書院生との接触から、1910 年代から 1920 年代にかけての仏領インドシナにおける日本人社会の動向を検討した[2]。それによって、初期日本人社会の構成員がどういった人たちで成り立っていたのかを、確認および検討することができた。東南アジアのなかでも仏領インドシナという限られた地域であるが、資料的制約があるため、こうした『大旅行誌』による、当時の「生きた」情報は[3]、仏領インドシナの日本人社会の解明においても重要であると考えられる。

そこで、本稿では、1930 年代後半から書院生が訪問した仏領インドシナに焦点をあて、いわゆる「国策の基準」が南進政策に方向転換した時期以降[4]、書院生が接触した人たちを通して、当時の在留日本人および日本社会を検討する。特に日中戦争が始まると、仏領インドシナでは日本人に対する警戒が厳しくなった時期でもあり、その様子を書院生は敏感に感じ取り、反応していたことは加納が指摘する通りである[5]。

日越関係史の研究においては、北部仏印進駐以降の政治・軍事関与に集中しているため、日中戦争初期の仏領インドシナの日本人社会および日本人の置かれた状況については不明な点が多く[6]、この部分を解明する意味はあると考える。そのため、35 期生（1938 年訪問）と 36 期生（1939 年訪問）の書院生の動向に焦点を絞って検討したい。

---

[1] 加納寛「書院生、東南アジアを行くー東亜同文書院生の見た在留日本人」加納寛編著『書院生、アジアを行く』あるむ、2017 年。藤田佳久『中国を越えて』大明堂、1998 年。

[2] 湯山英子「東亜同文書院生の仏領インドシナ調査旅行」『植民地文化研究』第 5 号、2006 年 7 月、不二出版。

[3] 学生ゆえの勘違いや思い込み、記述ミスがあるが、彼らの等身大の目線で現地在住者と交わした言葉や当時の様子は、貴重な情報と言える。それゆえ、事実関係の裏付けを取るなどの作業が必要になる。

[4] 白石昌也によると、日本が本格的な対南方施策を打ち出すのは 1939 年 7 月 26 日の米国の対日通商航海条約の破棄通告と 1939 年 9 月 3 日の欧州大戦勃発を契機としてであり、仏領インドシナに対する日本の関心は、援蒋ルートの遮断問題や、重用資源の産出地域である蘭印やマレーへの前進拠点としての重要性が中心だったという見解である（白石昌也「第二次世界大戦期の日本と対インドシナ経済政策」『東南アジア歴史と文化』第 15 号、1986 年、29 - 30 頁）。

[5] 前掲、加納「書院生、東南アジアを行く」179－181 頁。

[6] 日本人社会に関する研究では、橋谷弘「東南アジアにおける日本人会と日本人商業会議所」波形昭一編著『近代アジアの日本人経済団体』同文館、1997 年（228－231 頁）が唯一、1930 年代末の仏領インドシナ日本人会や経済団体などの動きについて触れている。

表 1　35 期生第 3 班面談者一覧

訪問地		面談者	宿	備考
上海	出発（6月）			
仏領インドシナ	ハイフォン		石山旅館	書院生の定宿（情報収集）。ホテルに行くも、宿泊せずにオートライでハノイに向かう。
	ハノイ	親友V		ハノイ駅で3人の出迎えを受ける。
		塩見書記生（領事館）		
		日本人会長		
		宗村総領事		領事館訪問
		坂元（台湾拓殖）		台湾拓殖招待の午餐会。
	サイゴン（6月19日）	奥田女史		埠頭で見かける。
		N代理領事（領事公邸）		日曜日のため公邸訪問。N代理の妻はフランス人。
		塩田		華僑事情に詳しい。訪問せず。
		岩本（邦人商員）		華僑経営のレストランに入る。
		高原（三井）		一緒にシャム領事館訪問。パスポートにサインをもらう。
		K氏		高原の紹介。
タイ	バンコク			
	アユタヤ			
カンボジア	アンコールワット		安南宿	
タイ	ナコンパトン	5人の日本人（会ったかどうかは不明）		台湾拓殖経営の開墾地（綿花栽培）
	シンゴラ	瀬戸（開業医）	瀬戸宅	宿泊（厄介になる）
マレー	ペナン			

出所：「暹羅あちこち」『靖亜行』東亜同文書院、1939年、320～350頁［大旅行誌30］から作成。

それによって、該当時期の東南アジアと日本との関係の一側面を明らかにすることが本稿の目的でもある。

そこで次に、東亜同文書院 35 期生の旅程および仏領インドシナでどういった人物と接触したのか、その人物から当時の状況を見ていこう。

1．35 期生第 3 班の行動

35 期生第 3 班は、1938 年 6 月に上海を出発した。書院生の構成メンバーは、坂下惣平、松原理一、中村源吉、前田五郎、濱和夫の 5 人で、当初の経路は、上海、基隆、台北、基隆、海防、盤谷、チェンマイ、盤谷、彼南、新嘉坡、香港、上海となっていた。35 期生の調査旅行全体としては、中支方面旅行班が全 20 班、南支・南洋・暹羅方面旅行班が 4 班構成で、後者の第 1 班が南支・台湾、第 2 班がマレー、第 3 班が暹羅、第 4 班が南洋となっていた[7]。

この第 3 班が仏領インドシナを訪問し、多くの在留日本人に面談している。彼らの訪問地からその足跡を追ってみると、ハイフォン→ハノイ→サイゴン→タイ（バンコク、アユタヤ）→カンボジア（アンコールワット）→タイ（ナコンパトン、シンゴラ）→マレー半島の順になっている（表 1 参照）。

順番に見ていくと、まず第 3 班の 5 人は、ハイフォン港に降り立ち、最初に向かったのは石山旅館である。この石山旅館は、歴代書院生がハイフォンを訪問した際に必ず宿泊する宿である。町の中心部に位置し、仏領インドシナを訪問する多くの日本人が行きかい、訪問者およびハイフォン在留日本人

[7] 「昭和 13 年度東亜同文書院学生大旅行予定表」「暹羅あちこち」『靖亜行』東亜同文書院 1939 年［大旅行誌 30］。『大旅行誌』は、オンデマンド版の『東亜同文書院大旅行誌』（発行：愛知大学、2006 年）のことであるが、本稿では実際の書誌、発行年を記した。但し、ページ数については、オンデマンド版とする。

にとっても社交および情報収集の場でもあった[8]。但し、第３班のメンバーは、宿泊せず急きょハノイに向かった。ハノイでは、親友Ｖと塩見書記生、日本人会会長の３人の出迎えを受ける。この３人は、この時代を反映するかのような人物であり、書院生が接触した意味は大きい。また、このときの様子を書院生メンバーの前田五郎は、戦後の回想録で「ハイフォンとハノイ間を 100 何里のスピードで自家用車でぶっ飛ばし東拓（ママ）ハノイではえらいご馳走になった」と記述している[9]。東拓は、台湾拓殖の間違えと思われる。彼らの乗った自家用車というのは、オートライユ（ガソリンカー）のことで、ハイフォンとハノイ間を２時間ほどで走る乗合自動車である[10]。

ここでまず、面談者の詳細を論じるにあたり、1920 年代からの仏領インドシナ在留日本人について若干の説明を加えたい。1925 年から 1938 年までの在留日本人数は加納寛も示す通りで、筆者の調査によっても日本人総数は、240～340 人（1915～38 年）の範囲であった[11]。彼らの出身地は、長崎県、熊本県、東京府、兵庫県、愛知県、福岡県の順であり、関西以北には長野、岩手、山形から数名確認できる[12]。構成員は、商業者が圧倒的であり、1935 年の商店数は、ハノイ 12、ハイフォン 7、サイゴン 6、その他 5 店となっていた。商業者の内容としては、小規模な「雑貨商（輸入・販売）」が大多数であり、ハノイにおいては雑貨輸入販売・漆輸出商、サイゴンでは雑貨輸入販売によって占められていた。商社の駐在員は数名程度で景気に変動されていたのが特徴として挙げられる[13]。

他の東南アジアの在留日本人数としては、規模が小さいことは指摘される通りであるが、だからと言って、在留日本人の役割が小さかったと判断できない。筆者はこれまで、小規模ながら活動してきたハノイの日本商が扱う貿易品である漆（液）に焦点をあて、その役割を明らかにしてきた[14]。上述した「国策の基準」が南進政策に方向転換したことで大企業が進出するようになった大きな転換点は、仏印進駐以降であるが、その前に台湾拓殖株式会社が 1937 年から仏領インドシナに進出し、台湾からの東南アジア進出が加速していくことになった。そして、1940 年代へと繋がっていったのである。

それがハノイの日本人会役員メンバーにも反映され、表２にあるように、従来の在留者以外にも会長として台湾拓殖の社員が現れてくるようになる。1937 年までは、従来の在留日本人である下村里寿、小田直彦、山田宇太郎、菊地市之助らが役員を占めており、彼らは漆貿易商や旅館を営むなど、長年ハノイ在住の面々である。松田敏は、大阪に本社を置く斉藤漆店の店長として漆貿易に

---

[8] 前掲、湯山「東亜同文書院生の仏領インドシナ調査旅行」233-234 頁。

[9] 前田五郎の卒業年は 1939 年の春である。就職先は、満鉄本社の用度課に勤務した。大連→奉天→新京に職場が移り、中国で終戦を迎えた。また、同じ班だった松原理一は、満鉄の撫順炭鉱の労務課に就職するも戦死した（『（卒業満四十五周年記念）続 靖亜行』東亜同文書院第 35 期生、1984 年）。

[10] ハイフォンーハノイ間は列車で４、５時間、オートライユだと３、４の駅を停車し所用時間は２時間ほどであると、大阪外国語学校で教える畠中敏郎が実際に乗った感想を述べている（畠中敏郎『佛印風物誌』生活社、1943 年、75 頁）。

[11] 湯山英子「仏領インドシナにおける日本人社会―日仏共同支配前を中心に」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、2008 年、785 頁。

[12] 外務省外交資料「外国在留本邦人罪籍調査関係一件仏領印度支那ノ部」（K-3-7-0-1-1）。

[13] 前掲、湯山「仏領インドシナにおける日本人社会―日仏共同支配前を中心に」。湯山英子「仏領インドシナにおける日本商の活動－1910 年代から 1940 年代はじめの三井物産と三菱商事の人員配置から考察」『經濟學研究』第 62 巻第 3 号、2013 年 2 月。

[14] 湯山英子「仏領インドシナにおける対日漆貿易の展開過程－1910 年代～1940 年代初めの現地日本人商店からの考察」『社会経済史学』第 77 巻第 3 号、2011 年 11 月。

表 2　ハノイ日本人会役員一覧

	1937年5月	1939年5月	1940年5月
会長	下村里寿	坂本四郎（台拓）	山田宇太郎
副会長	小田直彦	小田直彦	小田直彦
会計	山田宇太郎	松田敏	松田敏
委員	松田敏	菊地一郎	堤秀夫（台拓）
	菊地市之助	渡辺統一	Kotaru Sinji

出所：ハノイ国家第１文書館（Trung Tâm Lưu Trữ Quốc Gia I-Hà Nội：TTLTQG-I）東京理事長官資料群（No.79715～15、31、53、57）から作成。注：1939 年 5 月の委員に「菊地一郎」とあったが、「菊地市之助」と思われる。あるいは息子「菊地勝郎」の可能性もある。

は関わっている。松田敏は家族でハノイに住んでいた[15]。1939 年の会長には、前述した書院生の面談者「坂元」が登場する。この「坂元」は、坂本四郎[16]のことであり、台湾拓殖は、印度支那産業株式会社の設立のために 1937 年秋から台湾拓殖経理課主席だった彼を仏印に出張させ、そのまま駐在させた。坂本の下には、東亜同文書院出身の内川大海がいた[17]。35 期生は、台湾拓殖の面々と会い、情報収集活動をしたと思われる。

次に 35 期生がハノイで会った親友Ｖについて見ていこう。

2. 親友Ｖは同文書院の卒業生

親友Ｖは、まさにその内川大海であり、彼は台湾拓殖の社員として駐在するも、軍の仕事にも関与していた。それ故に、35 期生第３班の『大旅行誌』では名前を伏せていたと思われる。内川大海の自伝によると[18]、内川は 1916 年、高知県安芸郡土居村に生れた。1934 年 4 月に高知県派遣留学生として上海の東亜同文書院に入学している。1938 年 3 月に卒業（34 期生）、1937 年 7 月には沢山商会（沢山商事）[19]に入社し、ハノイ勤務となる。1937 年 12 月には、沢山商会の仏印事業が台湾拓殖に買収され、同社の子会社の印度支那産業に勤務した。同時に、台湾軍参謀部嘱託となり、援蒋物資調査に関わった。東亜同文書院生が、東南アジア各地で日本との経済関係を担う人材[20]となったと同時に軍事にも関わっていくことになる。34 期生の大部分である 80 人が通訳従軍[21]と

[15] 外務省外交資料「外国在留本邦人罪籍調査関係一件仏領印度支那ノ部」（K-3-7-0-1-1）。
[16] 1942 年の外務省外交資料によると、坂本四郎はハノイ日本人会副会長として、日本人学校の設置等の予算書を作成し、外務省に申請している。
JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B14090153200、外務省官制及内規関係雑件（制度改正ニ関スル参考書報）第十三巻（M-1-2-0-2_013）（外務省外交史料館）。
[17] 三日月直之『台湾拓殖会社とその時代』葦書房、1993 年、110 頁。
[18] 内川大海『シルクロードの夢ーある青春の記録』私家版、1993 年。
[19] 内川大海の表記は「沢山商事株式会社」であるが、彼の言う沢山商事は、澤山精八郎（1855 年、長崎県東彼杵郡大村生）が創業した会社である。父の熊右衛門が長崎県大浦郷で営んでいた澤山商店（船舶給水、艀運送、帆船運送）を継承し、日清戦争と日露戦争で長崎にて商売を拡大した。明治 38 年 5 月には、船を購入し海運業の始まりとなった。明治 39 年には澤山商店から「合資会社、澤山商会」とした。澤山商会の海外展開については年史に記載がない（『澤山汽船株式会社七十年史』澤山汽船株式会社、1988 年、3-７頁）。
[20] 前掲、加納「書院生、東南アジアを行く」183 頁。
[21] 藤田佳久「「幻」ではない東亜同文書院と東亜同文書院大学」『東亜同文書院大学と愛知大学』六甲出

表 3　従軍通訳派遣内訳（1937 年）

	日付	人数	集合・出発	所属
第1回	10月1日	5	長崎	海軍
第2回	10月25日	20	長崎	陸軍
第3回	10月30日	20	佐世保	陸軍
第4回	10月30日	19	東京集合 神戸	陸軍
第5回	11月7日	15	長崎	陸軍
第6回		1		

出所：「時局と我等」『嵐吹け吹け』東亜同文書院、1938 年、305 頁から作成［大旅行誌 29］。

なって戦争に関わったと同じように、内川は別の形で戦争に関わっていくことになった。次の表 3 に示したのが、34 期生の従軍派遣通訳の内訳である。

台湾拓殖に就職した同文書院生としては、中途採用という形になるものの内川が最初であろう。37 期生（1940 年度）に台湾拓殖に就職した者が一人確認[22]できるが、内川の入社が先にあった。

台湾拓殖による印度支那産業会社の設立過程については疋田康行の研究がある。設立に至るまでは、山根道一による立案と調整があり、続いて台湾拓殖と山根による事業引き継ぎを完了させたのが 1937 年 11 月だった。1938 年 1 月 20 日には、台湾拓殖の子会社である印度支那産業会社が設立された[23]。印度支那産業の代表となったのが山根道一である。山根は、日本の鉱山開発において仏印側との交渉役であり、1937 年から 1940 年にかけて台湾拓殖をはじめとする経済進出において重要な役割を担った人物である。

事務所設立については、前述した内川の自伝に詳しい。内川よると、1937 年 12 月 4 日に台湾拓殖が沢山商会の事業買収契約締結（買収代金、93 万ピアストル）筆頭理事の大西一三、沢山商会代理人の山根道一[24]が締結にあたり、内川は本事業と共に台湾拓殖に採用となった[25]。事務所の様子は、内川が次のように記述している。

> （山根道一事務所には）鉱山技師トリコワール、タイピストのシモン、経理課係他 3 人のベトナム人、現場監督としてタイグエン鉱業所に増井準一と正月鶴亀がいる。増井、正月はベトナム人と結婚し現地居住 20 年以上[26]。塩見書記生に連れられて、ハノイ第一の色街

版、1997 年、65 頁。

[22] 高村聰史「東亜同文書院卒業生の「就職」について」『東亜同文書院大学と愛知大学』六甲出版、1997 年、114 頁。

[23] 疋田康行「戦前・戦時期日本の対インドシナ経済侵略について」阿曽村邦昭編著『ベトナム国家と民族（上巻）』古今書院、2013 年、98 頁。

[24]山根道一の経歴は、沢山商会のハノイ事務所長、印度支那産業会社の取締役（後に顧問）、ベトナム独立運動支援、山根機関発足（1941 年 10 月）の機関長となり、同機関の変質・改名に伴い印度支那経済研究所設立、1943 年半ばに帰国、同研究所を東京に移転しハノイの研究所は支所として原田俊明が運営していた（前掲、阿曽村邦『ベトナム国家と民族（上巻）』xiv-xv＜筆者紹介＞）。また、山根道一に関する外務省外交文書においては「長崎沢山精八郎派遣員山根道一」としている（JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B09041014400、南洋ニ於ケル帝国ノ利権問題関係雑件／鉱山関係　第二巻(E-4-2-3-1-1_002) 外務省外交史料館）。

[25] 前掲、内川『シルクロードの夢』52-53 頁。

[26] 前掲、内川『シルクロードの夢』43-44 頁。

カムテンへ案内してもらう！[27]。

台湾拓殖では、増井準一や正月鶴亀のように長年、仏領インドシナ在住者を採用していることが分かる。増井準一は静岡県浜松出身、正月鶴亀は香川県小豆島出身であり[28]、タイピストのシモンが何者であるかは分からない。

台湾拓殖と沢山商事との事業買収契約はハノイ市カルノー街78番地で行われ、そのときの集合写真には、台湾総督府技師小笠原美津雄、氏原進、ベルトラン・スビラ、台湾拓殖理事大西一二、山根道一、鉱山技師トリコワール、台湾拓殖事業課長大西文一、会計キー、タイピストシモン、用度係日渡慶治、内川大海、バン、レ―、田英淳、製図工トーが納まっている[29]。

その後、内川大海は、西村部隊参謀部嘱託となり、同僚の氏原進と増井準一とともに情報収集と特殊工作を担当することになった。内川は、台湾拓殖の社員でありながら日本名のほかに中国名「陳思明」、ベトナム名「（阮文美）Nguyễn Văn Mỹ（グエン・バン・ミイ）」の３つの名前を使い分けていた。内川の表向きは台湾拓殖勤務であったが、もう一方でベトナム独立運動にも関与していたようである。これには、山根道一らの影響が大きい。

内川によると、当時のベトナム独立運動には、親仏、親日、共産主義の３つがあったようである。さらに、親日派も２つにわかれており、一つは大アジア協会（会長、松井石根大尉）関係の日本人と接触していたもので、在留日本人とは最も交際が多く、日本で

表 4　内山大海の所属先と軍関係の仕事一覧

年	月	所属	軍関連
1937 年	7月	沢山商会入社、ハノイ勤務	
1938年	2月		海南島派遣飯田部隊参謀部嘱託
	5月		海軍の海南島資源調査班に参加、経済調査。
	7月	台湾拓殖本社採用。業務部事業課勤務。	
	12月	同社、広東支店勤務。	
1939年	2月	海南島に出張、駐在。	
1940年	1月	台湾拓殖台北本社業務部南洋課に転勤。	
	7月	同、ハノイ支店に転勤。	ハノイ「援蒋物資監視団（西原機関）」嘱託、日本軍の仏印進駐準備。
	9月		仏印派遣西村部隊参謀部嘱託。
1941年	7月		仏印派遣軍飯田部隊嘱託、中島支援隊としてニャトラン上陸。
	11月		ハノイ山県部隊に転嘱、参謀部勤務。
	12月		南方総軍参謀部へ移籍。
1942年	2月		ビルマ派遣軍軍政部嘱託、平岡機関配属。
	7月		仏印派遣軍嘱託、山根機関に配属。情報工作を担当。
1943年	12月	帰国。台湾拓殖台北本社に辞表提出。	＊ベトナム独立派「愛国党」情宣部長の介添えとして帰国。日本の対ベトナム政策確認。
1944年	4月	藤田鉱業株式会社入社、海外事業部勤務。同年7月からシンガポールに滞在。	

出所：内川大海『シルクロードの夢－ある青春の記録』私家版、1993年、298～301頁から作成。

[27] 前掲、内川『シルクロードの夢』47-48 頁。
[28] 前掲、外務省外交資料「外国在留本邦人罪籍調査関係一件仏領印度支那ノ部」。
[29] 前掲、内川『シルクロードの夢』24-25 頁。

知られているのは、内川によるとこちらになる[30]。もう一つは、ハノイの医師グエン・スワン・チューを委員長とする愛国党であり[31]、党の資金部委員マダム・フオン・ツーという女性実業家から、「あなたはもう日本に帰らずに、いつまでもベトナムにいて、私たちの同士になってくれませんか。金に不自由はさせませんから」と勧誘を受けていた[32]。それに対し、内川は「私は日本人だ。出来るだけ協力は惜しまないけれど、日本人をすてて、あんたたちの同士になることはできない」と断っていた[33]。

こうした動きについては、立川京一が、日本人が支援したベトナム独立運動には複数あり、日本の研究ではベトナム独立同盟（ベトミン）に焦点を当てたものが大半で、それ以外の勢力となる親日系に分類される愛国党、大越党、越南復国同盟会、国社党、カオダイ教、ホアハオ教などを視野に入れたものはわずかしかないと述べている。愛国党のグエン・スワン・チューについては、立川の論考でも若干触れているが、愛国党の党首として親日的だったことを、武内房司・宮沢千尋がグエン・スワン・チュー（Nguyen Xuan Chu）の回想録などをもとに指摘している[34]。次に、２人目の面談者、塩見聖策について見ていこう。

3. 塩見書記生

塩見聖策は、奈良県出身、大阪外国語学校の仏語部 11 期生（1936 年卒）で、1935 年 4 月に外務書記生に合格している。6 月に中国の雲南に出張し、そのまま臨時雲南在勤となった。仏印へは 1936 年 2 月 8 日付でハノイ勤務となり[35]、35 期生が 1938 年 6 月にハノイで領事館の塩見書記生に会っている。塩見からは、仏印当局の日本人への監視の目が厳しいこと、仏印では蒋介石支援への態度が明らかであることが書院生に伝えられている。書院生は、ハイフォンからハノイに車で移動した際に、ハノイ駅を出ようとしたところでフランス人刑事から取り調べを受けており、身をもって日本人への監視の厳しさを体験した[36]。

一方で、書院生は、仏印当局が華僑の排日運動やデモを取り締まらず、ハイフォン港に積まれている蒋介石への援助物資からも、塩見から聞いたその様子が明白であることを確認し、憤りを感じていた。この頃の日本人に対する仏印当局の態度は、領事報告によると仏印当局からの数々の日本人退去命令を見ても明らかである[37]。また、当時ハノイに滞在した同盟通信の記者の回想録にも、日本人に対する監視の厳しさについて記述されている[38]。

加納寛によると、同じ 35 期生の他班が訪問したマレー半島、シンガポール、フィリピ

---

[30] 前掲、内川『シルクロードの夢』164 頁。
[31] 前掲、内川『シルクロードの夢』163 頁。
[32] 前掲、内川『シルクロードの夢』167 頁。
[33] 前掲、内川『シルクロードの夢』168 頁。
[34] 立川京一「第二次世界大戦期のベトナム独立運動と日本」『防衛研究所紀要』第 3 巻第 2 号、2000 年 11 月、67、70 頁。武内房司・宮沢千尋『西川寛生「サインゴン日記」1955 年 9 月～1957 年 6 月』風響社、2015 年、294、336 頁。
[35] 外務省外交資料『外務省年鑑（昭和十二年十二月編）』第 33 号、449 頁。『外務省報（昭和 10 年 7 月 1 日）』第 326 号、12 頁。『外務省報（昭和 11 年 2 月 15 日）』第 341 号、8 頁。当初の人事記録では、塩見堅策「Shusaku Shiomi」となっており、どの時点で「聖」になったかは分からない。自筆の文書では「聖」のため、本稿では「聖策」に統一して使用する。
[36] 前掲、「暹羅あちこち」『靖亜行』［大旅行誌 30］323 頁。
[37] 『外務省執務報告　欧亜局　第 2 巻（昭和 13 年）』欧亜局第 3 課昭和 13 年執務報告、1938 年。『外務省執務報告　欧亜局　第 1 巻（昭和 11・12 年）』欧亜局第 3 課昭和 12 年執務報告、103～105 頁。
[38] 大屋久寿雄『仏印進駐記』興亞書房、1942 年。大屋久寿雄『戦争巡歴』柘植書房新社、2016 年。

ンでも同様の緊張状態であったことを指摘している[39]。35 期生が見た在仏印華僑の反日的な動きとしては、サイゴンの日本商社社員の岩本（表１参照）に連れられて行った華僑経営のレストランに「越南華僑福建救済游芸会」のポスターが貼られ、華僑の活動が活発であることを確認する[40]。

そして、35 期生が上海に戻ってからになるが、『大旅行誌』を執筆していたときにハノイで会った塩見書記生の国境拉致事件が彼らにも伝わった。同旅行誌には「塩見氏は去る１月雲南国境視察旅行中、越境せる支那正規軍に拉致され、龍州より重慶に護送されスパイ嫌疑にて銃殺さるべし」と書かれた新聞記事を見て、心を痛めていたことが書かれていた。書院生がハノイで会った塩見が主張していたことは「仏印での日本軍による世論喚起の必要性」であり、そうした塩見の熱い思いが書院生の印象として語られていた[41]。

塩見はその後、中越国境を越えて中国の捕虜となり、国民党重慶政府支配下の日本人反戦運動に傾倒していくことになった[42]。書院生が仏印で会った外務書記生でさえ、危険な状況の下で行動していたのである。

そのほか、書院生の記述にある在留日本人には、在ハノイ総領事の宗村丑生がおり、ハノイ領事館がハノイ大使府となる前までの 1936 年 11 月 1 日～1939 年 1 月 20 日の在留が確認できる[43]。書院生は、宗村総領事に対して「上品な老人だ」という印象を持っていた[44]。サイゴンに移動してからの面談者は、「高原（三井）」「塩田」であるが、高原については、三井職員録では確認が取れなかった。塩田については、塩田商会の塩田敬人であり、1930 年代から雑貨輸入販売をサイゴンで経営している[45]。また、「N 代理領事」については、1938 年 7 月 1 日現在の『職員録』では確認が取れず、当時の領事は、高澤貞義（帰朝中）、書記生に中山又次、園山春作、不破清がいる[46]。

補足として、タイで宿泊した「瀬戸（開業医）」は、現在タイ在住の瀬戸正夫（写真家）の父にあたる。瀬戸正夫によると「マレー半島のダンベッサールの国境に接したソンクラー県のシンゴラ」で医師の父親が回生医院を開業していた[47]。

4．36 期生（1939 年 6 月）の行動から

翌年、1939 年 6 月 7 日にハイフォンに到着した 36 期生は、大久保泰、岡田晃、坂東薫の３人で[48]、彼らは、ハノイから中国国境への大冒険を試みる。「これまで国境調査に行った日本人は、塩見書記生だけであり、1938 年 12 月に支那憲兵に逮捕されて今に至るまでは、現地調査は自分たちだけであり、身を持って仏印当局の対日感情を調査するのだ」と意気込み、中越国境の町を目指

---

[39] 前掲、加納「書院生、東南アジアを行く」180-181 頁。
[40] 前掲、「暹羅あちこち」［大旅行誌 30］330 頁。
[41] 前掲、「暹羅あちこち」［大旅行誌 30］327－328 頁。
[42] 湯山英子「「日中戦争期の仏領インドシナと中国：外務書記生のアジア体験から」『文明 21』第 41 号、2019 年 3 月。
[43] （内閣印刷局編『職員録』佛領印度支那を語る 宗村丑生［前ハノイ總領事］、報知新聞南洋調査會 編『動く大南洋の實相』高山書院、1940 年、49 頁から。）
[44] 前掲、「暹羅あちこち」［大旅行誌 30］323 頁。
[45] 『南支那及南洋情報』台湾総督府官房外事課（105 号）。1936 年。
[46] 内閣印刷局編『職員録』内閣印刷局、1938 年（7 月 1 日付）。
[47] 瀬戸正夫『タイに生きて バンコク日本人会百周年に寄せて』アジア文化社、2015 年 1 月 3 日電子出版発行、10 頁。http://www.asiawave.co.jp/bungeishichoo/masao_seto.pdf［2017 年 12 月 2 日アクセス］。
[48] 「仏領印度支那 援蒋輸血路佛印を暴く」『大旅行記』1940 年 4 月［大旅行誌 31］。

した。彼らは、総領事はじめ在留日本人が止めるのを振り切って、昆明行きの列車に乗り込んだものの、ラオカイ（老開）に到着した途端、スパイの嫌疑をかけられてフランス側憲兵に捕まってしまった。現地で５日間投獄され、罰金 500 円を支払って解放された[49]。これが、中国側に捕まったとなると、塩見聖策と同じ道をたどることになったであろう。

また、彼らは、ハイフォンとハノイで中国服を着て中国人になりすまし、抗日宣伝の調査を積極的に行っていた。その内容を次に整理した[50]。

１、本年（1939 年？）6 月 15 日、武器弾薬輸送会社の西南運輸会社（宋子文の義弟宋子良が経営）が香港からハイフォンに移転した。
２、昨年（1938 年？）10 月に中央銀行、今年（1939 年？）1 月に交通銀行、中国銀行がハノイとハイフォンに増設された。
３、波止場における労働者の増加と賃金の高騰（武器輸送と中国品貿易の増加）。
４、紅河に輻輳する英国船には武器を入れている鉄板の箱があった。ハイフォンには鉄道工事のための物資、「重慶」「桂林」行きの多数のトラック群を確認した。
５、広東と広西からの引揚げ者の受入れ（但し、300 元以上の所持者を許可）。

・ハノイ：4 千人（事変前）が１万３千人（1939 年 6 月 15 日）
・ハイフォン：6 千人（事変前）が 4 万 2 千人（1939 年 6 月 15 日）

１～５については、日時が不確かで、それらを含め事実関係の確認が取れていないものの、西南運輸会社や中国の銀行の支店開設など、1939 年前後のハノイとハイフォンの動きが読み取れる。一方、36 期生のタイ班（田中信隆、松尾松一郎、河合祝男、村岡正三）は、海南島からハイフォン、ハノイ、サイゴンを経てバスでプノンペンに向かっている。プノンペンでは大南公司の陳氏を訪ねていた[51]。大南公司は仏印在住の松下光廣が 1922 年に興した会社で、1940 年代になるとタイ、プノンペンなどにも進出し、事業を拡大していた。戦時中は日本軍への物資納入が主となっており、大南公司は仏印だけでも約 20 ヵ所の支店・出張所を有した企業である[52]。近年、この大南公司に関する研究が進められてきているものの、タイやプノンペンでどういった経済活動を行っていたのかは、まだ明らかにはなっていない[53]。仏領インドシナでフランス人を含めた外国人を雇っていたことは確認できているが[54]、書院生が接触した陳氏が誰であるかは不明であるが、重要な情報である。今後、他の資料との付け合わせが必要であろう。

また、時期は遡るが、1937 年 6 月の 34 期生 26 班（武富二郎、白山正己、坪上正）が面談したのは、表３にある通りである。ここでもまた、プノンペンの大南公司を書院生が訪問している。日中戦争前のため、書院生はあまり緊張感がない。実際の経路は、ハイ

[49] 前掲、「仏領印度支那 援蒋輸血路佛印を暴く」［大旅行誌 31］331-332 頁。
[50] 前掲、「仏領印度支那 援蒋輸血路佛印を暴く」［大旅行誌 31］333-339 頁。
[51] 前掲、「タイ國」『大旅行記』［大旅行誌 31］355 頁。
[52] 北野典夫『南船北馬－天草海外発展史（後編）』みくに社、1982 年、198-199 頁。
[53] 前掲、立川「第二次世界大戦期のベトナム独立運動と日本」。北野典夫『南船北馬－天草海外発展史（後編）』みくに社、1982 年。北野典夫『天草海外発展史　（上・下）』葦書房、1985 年。平田豊弘「松下光廣と大南公司」『陶磁器流通と西海地域』2011 年 12 月。牧久『安南王国の夢』ウエッジ、2012 年。前掲、武内・宮沢『西川寛生「サイゴン日記」』。武内房司「大南公司と戦時期ベトナム民族運動－仏領インドシナに生れたアジア主義企業」『東洋文化研究』第 19 号、2017 年 3 月。
[54] LUISE REPICARD 氏の父親は戦時中にサイゴンで大南公司に勤務していた（2005 年 6 月 15 日聞取り）。

表 5　34 期生・第 26 班の面談者一覧

訪問地		面談者	宿	備考
仏領インドシナ	ハイフォン　*上海：1937年6月1日出発			
	ホンゲイ炭鉱見学	三井出張員K氏		一緒に食事。記述のみ：西原旅館（数十年経営）、岩井洋行の山もある。
	ハノイ		小田旅館	
	ビン			
	フエ		中山氏宅	8日間滞在
	ドンハー	小田氏駅で出迎え	末松氏宅	駅から60キロ自動車で行く。味噌汁をいただく。
	サバナケット	小田氏と末松氏同行	華商旅館	自動車で移動。
	プノンペン		大南公司	事務所2階に宿泊。日本人3人いた（一人はサイゴンから来たばかり）。サイゴンから持参したという奈良漬を食べる。

出所：『嵐吹け吹け』東亜同文書院、1938年［大旅行誌29］から作成。

フォン→ハノイ→（フエ）→ドンハー→サバナケット→シャム→メコン川下り→プノンペン→アンコールワット→プノンペン→サイゴンとなっていた[55]。

表３にあるホンゲイの「三井 K 氏」は、馬渡嘉八かと推測できる。三井職員録によると馬渡嘉八、廣瀬高彦の２人（1937 年：海防）がおり、長年ホンゲイ炭の仕事に関わっていたのが馬渡嘉八である[56]。小田旅館の小田直彦（熊本県天草出身）は、前述したハノイ日本人会の役員である。息子が小田親（1922 年ハノイ生れ）で、父の直彦と思われる。小田親によると父はもともと写真師で、仏印に来てから一時ランソンで写真館を経営していたが、ハノイに移転した。1930 年代初め頃、松下光廣が経営していた旅館を引き継ぐ形で小田旅館を開業した。父の直彦は 1945 年に死去している[57]。フエの「中山」は、中山磯治（岡山出身）のことで、フエで写真館と雑貨店を経営していた[58]。ドンハーの「末松」は、末松豊作のことと思われるが、1913 年の名簿によるとラオカイ在住になっており[59]、その後ドンハーに移転したのか、あるいは親戚なのかは分からない。

まとめ

本稿では、1930 年代後半から書院生が訪問した仏印に焦点をあて、書院生が接触した仏印在留の人たちを通して、日中戦争初期の日本人社会を検討してきた。東亜同文書院生の 34 期生（1937 年）、35 期生（1938 年）と 36 期生（1939 年）が仏印を訪問しており、特に本稿では 35 期生の動向に注目した。なぜなら、「国策の基準」が南進に大きく舵を取り、その影響で台湾から台湾拓殖会社が進出してきた時期と重なっているからである。そして、日中戦争が始まった。しかし、仏印の日本社会の構成員が大きく変化するのは 1940 年以降であり、この時期はまだ準備段階でもあったものの変化は徐々に表れていた。同時に、日中戦争の影響で、仏印当局および華僑の日本人に対する態度には厳しいものがあり、書院生はそれを直接、体験した。

書院生は、そうした状況下でも当時の重要な人物と面談し、多くの情報を得ていた。日本人会長の下村里寿、坂本四郎（台湾拓殖）、塩見聖策（外務書記生）、内川大海（台湾拓殖・軍）らである。坂本四郎と内川大海

[55] 第 34 期生、仏領印度支那・暹羅方面旅行。「南国の秘密」『嵐吹け吹け』東亜同文書院、1938 年［大旅行誌 29］。

[56] 前掲、湯山「仏領インドシナにおける日本商の活動－1910 年代から 1940 年代はじめの三井物産と三菱商事の人員配置から考察」111 頁。

[57] 小田親氏（2003 年 11 月 16 日聞き取り）

[58] 『南支那及南洋情報』台湾総督府官房外事課（105 号）、1936 年。

[59] 外務省外交資料「各国内政関係雑纂、仏領印度支那ノ部」（1-6-3-2-13）。

は、仏領インドシナ当局との交渉役であった山根道一の下で働き、内川は同時に日本軍の諜報活動も担っていた。この時期の日本人社会や日本人の置かれた状況は、先行研究では簡単に触れられる程度で、実態はつかめていない。いくつかの資料を照らし合わせることで、書院生の「生きた」情報が、当時の日本社会を明らかにする上で重要であると言える。1937 年から 1938 年にかけては、華僑の排日運動、仏印当局からの厳しい監視下にあったことは、書院生の現地体験から確認することができるが、彼らが調査した華僑の動きなど確認が取れていないものもあるため、それらは今後の課題としたい。

講演会
東亜同文書院生の仏領インドシナ調査旅行　―日中戦争期の在留日本人との接触―
（2018 年 6 月 30 日、愛知大学豊橋キャンパス本館第 3・4 会議室）